

## アフリカとアラブの文化要素の混濁

スーダン共和国（以下、スーダン）はアフリカ東北部に位置しており、人口約 3,400 万人、国土面積は日本の約 5 倍、アフリカでは 3 番目に大きな国である（2011 年 7 月に南スーダン共和国が分離独立するまではアフリカで一番面積の大きな国であった）。



ソルガム



石焼き羊肉

南北分離前のスーダンについては、アフリカ系諸民族で構成されキリスト教徒（および伝統宗教およびアニミズム）の多い「南部」に対し、アラブ系イスラーム教徒が多数を占める「北部」という二分法的図式で説明されることが多い。他方、「北部」のスーダン共和国においても、ベジャ族、ヌビア族、フル族など非アラブ系の多数の人々が存在しており、北部＝アラブ＝イスラームとして単純な対照でわりきれない側面があるのも事実である。



アカシア



タマネギ畑



アラビア料理マンディ



果物の生ジュース

しかし、これまで中東のシリア、パレスチナ、ヨルダン、エジプトなどいわゆる「アラブ」の国々で仕事をする機会の多かった筆者にとってアラブの延長の匂いを感じることは確かなことであり、スーダンをアフリカとアラブの両方の文化要素が混濁した不思議な空間であると考えてきた。

スーダンという名前は「黒い人」というアラビア語に由来するが、アラビア半島および北方からアラブ化を受け入れてイスラーム教徒になった黒人たちの国がスーダンということであろうか。こうした南北の交流軸に東のハバシーヤ（現エチオピア国、エリトリア国）との東西軸がかさなり、アフリカ大陸の土着文化にさまざまな物産複合の交流が加えられ、色彩豊かな文化が歴史的に形成されてきたとみられる。

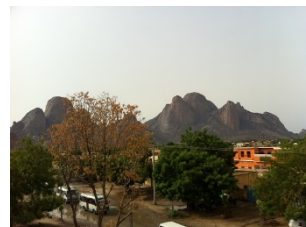


公設のスーク

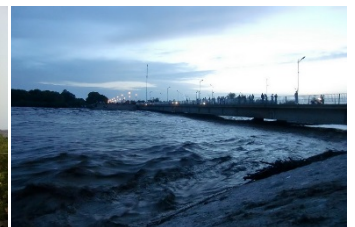


特産のライム

筆者は、2011 年 1 月以来、スーダンのカッサラ州における JICA 技術協力プロジェクトにかかわってきた。プロジェクトでは、州農業省の普及サービスの能力向上がおもな目標であり、農民・女性を対象にしたパイロット活動の協働をとおした普及員の人材育成をはかってきた。



トーティル山



季節河川ガッシュの水流

本シリーズ（6 回）では、本来業務からはなれたところで、スーダン・カッサラの日々の生活世界のなかから紙幅のゆるす範囲で、この魅力に富んだ国の文化的・社会的な側面を随想風に紹介してみたいと考えている。それこそ、気のおもむくままに、農民、農業技術、食品加工、食文化、植物などに関するトピックスをとりあげていくが、次回は乾燥地における伝統的な天水農業における生産上の課題と農民・牧畜民の生業の取り組みについてふれる予定である。